

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

「おはよう、まい。もう起きたのですか。」

台所は湯気とラジオの音で賑やかだった。その湯気の向こうから、祖母は私に気づいて微笑み、声をかけた。彼女は英国人だったが、若い頃から日本にいたのでとても流暢な日本語を喋った。

小学生の頃、私は学校が長い休みに入るとよく祖母の家に泊りがけで遊びに行った。このときは六年のつまり、小学校最後の冬休みだった。祖母は伴侶の祖父を亡くして、一人で暮らしていた。

「おはよう、おばあちゃん。」

私はまだ幼くて、起きたら隣に寝ているはずの祖母がいなかったので、意識の半分は夢のなかにいるような状態で、バジャマのまま、台所まで出てきてしまったのだった。

「寒いですよ。」

祖母はそういつて、椅子の上に置いてあった自分の毛糸のショールを私の肩にかけ、くるんだ。毛糸はかまどの煙をたっぷり吸い込んでいた。燻したような匂いが私を包んだ。冬の頃のあの家を思い出すと、いつもこの匂いが甦ってくる。煙たいのだが、温かい。いくら煙くても——ときには目が A して、まばたきするほどだったが——あの湿り気のある実直な暖かさには代えられなかった。

「着替えてくるね。」

部屋に戻ってバジャマを脱ぐと、寒さで腕に鳥肌が立った。

「うー寒い。」

歯の根を B いわせながら思わず体じゅう力ませ、着替えを済ませた。それからもう一度台所へ戻り、台所のドアから外へ出た。風がざあっと吹いてきて、私は思わず目を閉じた。寒さで顔が C とこわばり、痛いほどだった。外の水道近くに置いてある洗面器を見て驚いた。中の水が凍っていた。台所へ駆け戻り、

「おばあちゃん、水、凍っているよ。」

「ああ、そうでしょう。冬の間はお風呂場で顔を洗ってください。今、お湯を出します。」

祖母はストゥの上に置いてあった薬罐のお湯を金盥に出し、水を足して渡した。私はそれを持って風呂場へ行き、大急ぎで顔を洗い、歯を磨いた。普段町で生活しているときは、いくら寒いといっても、こんな体の芯から凍えるようなことはなかった。山の冷氣には、体じゅうの皮膚の毛穴から忍び入ってくるような容赦のなさがあった。

「最初にこの家で冬を過ごしたとき、寝る前におじいちゃんの枕元に置いておいたコップの水が凍りました。」

朝食のとき、祖母は紅茶カップを手に微笑んでいた。

「ええ？ 冷凍庫みたい。」

「そう、天然の冷凍庫。ジュースは、外に置いておいたらシャーベットになりますよ。」

「うわあ……。そうか、そうだよねえ。冷凍庫と同じなんだもん。夏にそれができたらいいのにねえ。」

私の頭の中は、シャーベットという言葉でいっぱいになっていた。さぞかし目も輝いていたことだろう。

「そうね。でも、夏は暑い。暑いと外では水はできないわけです。」

祖母は相変わらず微笑みながらいったが、いくら幼かったとはいえ、私ももちろん、そんなことはわかつ

ていた。祖母は本気で私を論者として起しているのだろうか。それとも冗談なのだろうか。本気としたら、祖母は私がそんなこともわからないような子どもだと思っているのか。私は心配になった。それで、そっと、

「あのね、暑いと水ができないことは知ってるよ。」

と、小さくいつてみた。祖母はふっと吹き出した。

「私も、まいがそれを知っているだろうとは思っていましたが。」

ああ、じゃあ、やつぱり冗談だったんだ、と、私は安心して、そんなことにこだわった自分が恥ずかしくなった。

② 自分が相手にどう受け止められているのかということが、私はその頃、とても気になっていた。と同時に、そんなことを気にする自分が情けなかった。そういうことばかり考えていると、つくづく自分が嫌になつた。私は卵立てのなかの、半熟の卵をぐるぐるとかき回した。祖母はその指先を見ながら、ゆっくりと、

「まいは、自分が相手によく思われたいではなくて、正しく理解されたいだけなのではないですか。」
③ と、繭のなかからそっと糸を繰り出すようにいつた。

祖母のこの姿勢——慎重に、デリケートなものを扱うようにことばを選び、相手に語りかける——、ときにはぎこちない日本語のように響くけれど、この姿勢は彼女の一生を通じて、少なくとも私に対しては一貫したものであった。

どうして祖母はあいうことが、まるで日常の動作のように気負わずにできたのだろう。今も時折、こういうふうにいるとは思っては不思議に思う。彼女にとって日本語が母語でなかったせいでだろうか。それゆえにことばとの間に緊張感があり——少なくとも、最後まで「狎れ」は発生しなかった——惰性でことばを流してしまうことをせず、いつもできるだけ正確を期していた。そして、ことばを投げかけて終わり、ではなく、そのことばを自分の意図するように相手がキャッチしているかどうか、それを見届けようとしていた。祖母がやっていたのは、そういうことだったのだろうか。

④ 祖母にそう声をかけられ、私はハツとして顔を上げた。祖母は続ける。

「そうだとしたら、いちいち訂正したり、念を押したりすることも、意味のあることですよ。」

なぜ彼女は、あのとき私の考えていることがわかったのか。私は心底驚いて、

「あのね、ほんとうは、そのことをちゃんといおうかどうか、迷ったの。」

うんうん、と微笑んで、彼女はもうそれ以上は何もいわなかった。

その日、昼食を終えると、祖母は麓の村の公民館で、フルーツケーキの作り方と簡単な英会話のクラスを頼まれていて出掛けに行った。正確にいうと、英語でフルーツケーキの作り方を実演してみせるのだそうだった。英語、ちゃんと出てくるかしら、と、彼女にしては珍しく不安そうにいつたので、私はおかしくなつて笑った。

誰もいない昼日中、私はキッチンテーブルでその日の分の宿題を済ませた。それからリビングに行つて、外がぼかぼかと暖かそうだったので、窓を開け、絨毯の上に横になり、ぼんやり外を眺めた。枯れ草の間から、やわらかそうな若い緑の草が覗いていて、優しい冬の陽があたっていた。近くで、ヒンヒンヒン、とジョウビタキの声がしていた。私はすっかり眠りに誘われていた。

うつらうつらとしていたら、突然近くでけたたましいニワトリの声がして目が覚めた。雄鶏が地面をほじ

くり返して何かつついている。夜、ニワトリたちはニワトリ小屋で寝るが、昼間はこうやって庭に出ているのだ。向こうでは雌鶏が二羽、盛んに土を突つついている。よくは見えなかったが、何かの虫を見つけたらしかった。二羽の視線の先が、地面の一点で合っている。そこへすかさず雄鳥がやってきて、当たり前のように横取りしてしまった。こういうことが繰り返されていたのだろう。

⑤ 見ていて私は、なんだか腹が立ってきたのだ。まず、あの横柄そうな態度が気に入らなかった。なんであんなに威張っているのか。卵も産まないくせに、と思った。

その、卵も産まないくせに、という非難がなんとなく不当なものであることは、私にもわかっていたが——なぜなら、それは雄鶏の非ではないのだし、また人間の側の利益を基準にしているのは明らかだったから——、感情的になると、人はなかなかフェアにならないものだ。

次に同じことが起こったときは、もうじつとしていられなかった。私は立ち上がり、憤然として玄関を出た。そして裏庭の方へ回る途中にある、庭仕事道具のしまってある小屋の戸を開け、庭箒を取り出した。箒をきつと結んで決然と裏へ回る。そこでまたミミズを独り占めしている雄鶏を見、思い切り箒でそのお尻を叩こうとし、瞬間ちよつとためらって、箒を逆にし、柄の方でつついた。不意をつかれた雄鶏は、前につんのめったが、何が起きたのか理解すると、ものすごい勢いで私に向かって走り出した。私は驚いて、みっともないことに思わず箒を放り出して逃げた。すぐに終わると思っていたが、雄鶏は思いの外しつこく、うとう玄関のところまで追ってきたときは、私は真剣に恐怖を感じた。

慌てて家のなかに入り、大急ぎで戸を閉めた。思わず大きく深呼吸をした。なんだかホラー映画のようだった。映画なら、ここで家のなかのどこからか、突然ニワトリが飛び出してきたりするものだが……まさかね、と思いながら、ハッとした。リビングの窓！さっき開けたのだった。そつと覗くと、いつの間にか窓は自分で閉めていたらしく、ほつとした。硝子越しに雌鶏が二羽、陽だまりのなかで何ごともしなかったかのよううに地面を足で蹴ったりくちばしで突いたりしているのが見えた。のどかで平和な光景だった。ひとまず彼女たちのひとときの平安は守ってあげられたのだ、と私は自分を慰めた。

それにしても雄鶏はどこにいるのだろう、もしかしたら、玄関の前でじつとドアが開くのを待っているのではないか。だとしたら私は一生この家から出られないのだろうか。今考えると笑ってしまうが、そのときは本気でそう考え、だんだん怖くなった。玄関のところへ行き、そつと、ほんの少しだけ、ドアを開けて外の様子を見てみよう、そう思って玄関ドアのノブに手を伸ばしたそのとき、突然ドアが開いた。私は思わず、「ぎゃー。」

と叫んだ。

「ああ、びっくりした。いったいなんの騒ぎです。」

祖母だった。私はすっかり力が抜け、

⑦ 「なんだ、おばあちゃん。……おかえりなさい。」

「ただいま。何があったのですか。まあ、とにかく台所へ行きましょう。ケーキもありますよ。」

「わあ。すぐにお湯をわかすね。」

私はほつとしたのと少し恥ずかしいのとで、いつもより派手にリアクションして、走るようにして台所へ行き、薬罐に水を入れ、火にかけた。祖母がケーキを切り、お茶の準備をしている間、ことの顛末を話した。「ああ、それで、雄鶏が前庭まで出てきていたのね。裏に行くようにいっておいだから、もう大丈夫ですよ。」

「ほんとう？ ああ雄鶏、ずつと私のこと、つけ……狙わないかしら。」

「そこまで執念深くありませんよ。一晚眠ったら、いや、もう忘れてるでしょう、ニワトリってそういうもの。大丈夫、大丈夫。」

祖母は私にケーキを差し出した。様々な種類のドライフルーツやナッツがどしりと入っている。それからミルクと半々に入れた熱い紅茶も。祖母は、私用にはいつも、温かいミルクをたっぷり入れた。

「そうかなあ。あれだけ怒ってるってことは、案外すごく傷ついていたらしい。」

私は、ミルクティーを一口飲んだ。

⑧ 「私なら忘れられないだろうな、一度攻撃されたことは。私、けっこう傷つきやすいみたいなんだ。」

ぼそつと付け足した。

思えば、私はここで、心理的に少し踏み出した。祖母の出方を窺っていたのだと思う。祖母はいつも私を受け入れてくれたが、リアルタイムの自分の切実な悩みに、どれほど祖母が向き合ってくれるか、私にはまだわからなかったのだ。

子どもは自分でも気づかずに、さりげなくそういう重い「試し」をする。大人は自分が試されていることになかなか気づかない。それでおぼろげな対応をしてしまう。ほんとうはその一瞬、自分の全力を賭して向き合わなければいけないときなのに。けれど、私の祖母は、そういうことがわかるひとだった。

祖母は黙って頷いていたが、ふと、

「ああ、ケーキにクリームをかけましょう。ちよつと待ってね。」

そういつて立ち上がり、卵籠のなかから卵を取り出すと、小さいボウルに割り入れ、かきほぐした。それから小鍋にミルクと砂糖とコーンスターチを全部いっしょに入れた。そしてくるくるかき回すと、火にかけ、更にかき回しながらほぐした卵を入れてゆく。また泡が立つ。バターを入れる。

そういう動作がすべて、途切れることなく、流れるように続くのを、私はいつも、飽かず眺めていた。今でも目の前に浮かぶ。いつでも実況中継できるほどに。

祖母は火を止めてなお、鍋の中をかき混ぜながら、

「傷つくのは仕方がないです。まいはそういう『質』なのだから、そのことは諦めないと仕方ないです。」

ゆつくりと、自分のなかから紡ぎ出すようにいった。それを聞いて、私は顔を赤らめた。一瞬の戸惑いと反発と、それから、安心感。熱い湯船に浸かって、瞬間身体は緊張するけれど、じわじわと解きほぐされていくような安心感。このお湯は、自分の味方なんだ、緊張しなくていいんだという、全面降伏の安心感。

そういう質だから、仕方がない、というのは、傷つくことなんかないようにもつと強くなれ、と励まされるのは正反對のベクトルのことばだったが、不思議な説得力があった。どんなに頑張っても、自分が自分である限り、何かで傷つくんだらうな、という気がしていた。けれどそのとき、祖母に、いわば引導を渡されたにもかかわらず、お先真っ暗、という絶望的な気分ではなく、むしろどこか明るい、そう、自分の行き

先にほのかに灯りがともったような明るい気分になっていた。祖母は続けてこういった。

「まいはかしこい子ですから、自分のことがわかる。これから先、どんな傷を負っても、その傷で、自分がすつかりだめになつてはしまわない、って確信があるでしょう。」

⑩ このことは、私をまったく違う次元、自分の人生を一瞬にして俯瞰する次元にもつていった。私はこのときまだ十二歳で、世間も知らず、すべてにおいて経験も足りなかったが、そういうことは関係なく、こ

れからも自分には手痛いことが起こり続けるだろうこと、それに自分がひとつひとつ、心身ともに傷つきながら悶々たるをえなくなるだろうことを、真夜中の山野に雷が光って一瞬すべてが視界に入るように、把握したのだった。かなりのことが起こるだろう。身も心もズタズタになるようなことも。けれど、それが、私をすっかりだめにするのではないだろう。今までそうであつたように。

私はどう応えていいのかわからず、黙っていた。祖母は、

「どんなことが起こっても、『こんなことは私の致命傷にはならない』って、自分に言い聞かせるんです。そうすれば、そのときはそう思えなくても、心と体のどこかに、むくむくと芽を出す、新しい生命力の種が生まれます。」

「こんなことは私の致命傷にはならない」。

私にはこれまで、確かに致命的と思われるような出来事も起こったけれど、そのたび私は、祖母の教えを忠実に守り、「こんなことは私の致命傷にはならない」と、まじまないように唱え続けてきた。起き上がることもできないような日々が続いても、そのことは、冬の午後の暖かい光のように、辛抱強く、凍え切つた大地に吸収されていったのだった。

こんなことで、自分がだめになることはない、決して。

こんなことで、あなたはだめにならない、決して。

⑫「おばあちゃん、いばら姫の仙女みたい。」

私は自分が教えられているばかりの状況に、反発する気分があつたのだろう、それで何か気の利いたことをいいたくなつたのだろうと思う。ふっと、直感的に閃いた比喻をひけらかしたくなつた。

「いばら姫の仙女？」

「ほら、いばら姫が生まれたとき、悪い仙女が呪いをかけるの。この子は十五になつたら、紡錘に指をさして死ぬ運命だ、って。それでみんな絶望するんだけど、最後にいい仙女がまじないをかけるの。私には、呪いを消す力はないけれど、それを少し変えることはできる。この子は、十五になつたら紡錘に指をさして倒れ、そのまま死んだように眠ってしまう。けれど、王子が現れて眠りから目覚めるだろうって。」

「はあ、なるほど。」

この比喻は、我ながら、的を射ていた。

祖母は、私の運命を言い当てたけれど、対処するおまじないも教えてくれた。自分がそばにいて励ますことができない未来に、この「生き難い」孫が、なんとか自力で生き延びていけるように。

私は結局、あの祖母の絶対的な愛情には、立ち向かうことはできなかった。どんなに反発しても、最後には全面降伏しかなかったのだった。いやいや、そういうふうに対立するものでは、そもそもなかったのだつた、のに。

「今、あの雄鶏の長所をまいに話してあげようと考えていたんですけれど……。」

祖母はそういつて、カスタードクリームをケーキにかけながら、困つたように小首を傾げ、

「すぐには見つからなくて。」

と、すまなさそうにいった。

それが可愛らしくて思わず吹き出した。私はなんだか楽しくなつた。

「おばあちゃん、大好き。」

祖母はいつものようににやりとした微笑みを含んだ声で、

「アイ・ノウ。」

と、返した。遠くであの雄鶏の声がして、それからカラスがどこか遠いところでそれに応えるかのように、カーアとのんびり鳴いた。私は今なら、祖母とあの雄鶏の長所について話し合えるような気もしている。

けれどそういうことはもう、すべて遠い昔の話だ。なのに折に触れ、こうしてあのときの情景が鮮やかに蘇り、思わず目を閉じてしまう。長い日差しが、台所の窓から柔らく入り込み、壁やテーブルの上、食器や、ケーキや、微笑む祖母の半身を、濃い橙色に染め上げていた、穏やかな冬の、午後の光を。

(梨木香歩『西の魔女が死んだ 梨木香歩 作品集』「冬の午後」より)

※(注) 横柄—— いばつてえらそうにする様子。

ベクトル—— 方向。

引導を渡された—— 最終的な結論を言い渡されて、あきらめさせられた。

俯瞰—— 高い所から広く見渡すこと。

致命傷—— 再起できないほどの大きな痛手。

紡錘—— 糸をつむいで巻き取る道具。

問一

□ A～Cにあてはまる言葉として適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア ガチガチ イ バリバリ ウ しばしば エ ぼりぼり オ ざわざわ

問二

線①「祖母は私がそんなこともわからないような子どもだと思っているのか。私は心配になった。」とありますが、「そんなこと」とはどのようなことですか。文中の言葉を使って、解答らん「こ」と。につなげるように、十字程度で答えなさい。

問三

線②「そんなことを気にする自分が情けなかった。」とありますが、「そんなこと」とはどのようなことですか。答えとなる部分を文中からぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問四

線③「繭のなかからそつと糸を繰り出すようにいった。」とありますが、この表現は祖母のどのような態度を表していますか。答えとなる部分を文中から三十文字以上三十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問五 —— 線④「祖母にその声をかけられ、私はハッとして顔を上げた。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「その声をかけられ」とありますが、「そう」の指す内容を文中からぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

2 「私」が「ハッとして顔を上げた」のはなぜですか。解答さんの「から。」につながるように答えなさい。

問六 —— 線⑤「見ていて私は、なんだか腹が立ってきたのだった。」とありますが、「腹が立ってきた」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 弱い立場の雌鶏を雄鶏が突ついて攻撃したから。

イ 気持ちよくリビングで寝ていたところを起こされたから。

ウ 雄鶏が雌鶏たちの見つけた虫を横取りしたから。

エ 雌鶏とちがつて雄鶏は卵を産むことができないから。

問七 —— 線⑥「まさかね、と思いながら、ハッとした。」とありますが、「私」はなぜ「ハッとした」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 主人公に怒った雄鶏が家の奥の部屋から飛び出して、おそいかかってくるというホラー映画のワンシーンを思い出して、胸のどきどきが高まったから。

イ 庭に残っていた雌鶏たちが、家に逃げ込んだ「私」の代わりに、怒った雄鶏によってひどい目に合わされることになるのではないかと不安に思ったから。

ウ 箒でお尻をつつけば、雄鶏が逃げ出すと思っていたのに、かえって「私」をしつこく追いかけてきたので、雄鶏をつついたことを後悔し反省したから。

エ 昼寝前に、外がぼかぼかと暖かそうだったのでリビングの窓を開けたことを思い出し、怒った雄鶏が部屋の中に入ってくるのではないかと動揺したから。

1 - 7

問八 —— 線⑦「なんだ、おばあちゃん。……おかえりなさい。」とありますが、この時の「私」の気持ちについての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 映画の世界のように、雄鶏が自分でドアを開けられたのではないかと興奮したが、祖母がドアを開けただけなのだと分かって残念に思っている。

イ 怒った雄鶏が、自分でドアを開けて入ってきたのではないかとびくびくしたが、祖母が帰ってきただけなのだと分かってほっとしている。

ウ 私は雄鶏がドアを開けたのではないかとびくびくりしたが、祖母はそんな私の気持ちをわかってくれないため、不快に思っている。

エ ドアの前で雄鶏が待ちかまえているのかとドキドキしたが、偶然帰ってきた祖母が雄鶏を追いかけてくれたのだと分かって感謝している。

問九 —— 線⑧「私なら忘れられないだろうな、一度攻撃されたことは。私、けっこう傷つきやすいみたなんだ。」ぼそっと付け足した。」とありますが、この私の付け足した言葉に対する祖母の言葉を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十 —— 線⑨「お先真つ暗、という絶望的な気分ではなく、むしろどこか明るい、そう、自分の行き先にはのかな灯りがともったような明るい気分になっていた。」とありますが、なぜ「私」は「明るい気分」になったと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 祖母に、傷つくことはどうしようもないことなのだから諦めないと仕方がないことなのだと言われたことで、自分の生まれつきもっている性質を素直に受け入れる気持ちになったから。

イ あなたはかしこい子だから自分のことがわかるはずだと祖母に言われたことで、これから先、どんな傷を負っても、自分がすっかりだめになつてはしまわないという確信を持ったから。

ウ 祖母も他の大人たちと同じように、リアルタイムの自分の切実な悩みにそれほど真剣には向き合ってくれないだろうと思っていたが、予想外に真剣に話を聞いてくれ、喜びを感じたから。

エ 傷つくことはどうしようもないことなのだから、諦めないと仕方がないのだということは、自分も感じていたことだったため、思った通りの言葉を祖母がかけてくれて安心したから。

1 - 8

問十一——線⑩「このことは、私をまったく違う次元、自分の人生を一瞬にして俯瞰する次元にもっていった。」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 祖母の言葉は私を時間や空間を飛び越えた世界へとつれて行き、私にこれからの人生で起こるであろう出来事を一瞬で把握させることになったということ。

イ 祖母の言葉は自分に自信の無かった私を勇気づけ、自分ではまったく気がついていなかった自分の隠れた長所を一瞬で理解させることになったということ。

ウ 祖母の言葉は私を目の前の出来事からいったん遠ざけ、傷つきながらも何とか乗り越えてきた自分の過去を振り返らせることになったということ。

エ 祖母の言葉はまだ十二歳ですべてにおいて経験も足りなかった私に、しっかりとした大人に成長する方法を教えることになったということ。

問十二——線⑪「そのことは、冬の午後の暖かい光のように、辛抱強く、凍え切った大地に吸収されていたのだった。」とはどのようなことをたとえた表現ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 祖母のまじないのことばが、打たれ弱かった私の心を強くしたということ。

イ 祖母の魔法のことばが、厳しい自然の寒さから私を守ってくれたということ。

ウ 祖母の祈りのことばが、私の病気を知らないうちに治してくれたということ。

エ 祖母の教えてくれたことばが、傷ついた私の心をやわらげたということ。

問十三——線⑫「おばあちゃん、いばら姫の仙女みたい。」とありますが、なぜ「私」は「おばあちゃん」のことを「いばら姫の仙女」みたいだと考えたのですか。解答さんの「から。」につながるように文中から三十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問十四 この物語についての説明として正しいものを次のア～オの中から二つ選び、その記号を答えなさい。

ア 冬の厳しい寒さが苦手なため、小学生のころの私は、祖母の家での生活を快く思っていなかったが、大人になってから振り返ってみると、それもよい思い出だったと感じている。

イ 祖母の「傷つかなくてよくなるように、心を強く持ちなさい」という思いを、小学生のころの私は理解できずにいたが、大人になってようやく理解することができた。

ウ 大人になった私は、小学生のころの祖母との思い出を振り返ることで、当時は何となくしか理解できなかった、私に対する祖母の愛情の深さに思いをよせている。

エ 小学生のころの私は、私のことは何でもお見通しで理解しているのだという祖母の態度が気に入らず、つまらないことで祖母に反発してしまうことが多かった。

オ 私は祖母の教えを守り、傷つくことがあっても、「こんなことは私の致命傷にはならない」と唱え続けることで、何とか自力で立ち直ることができてきた。

二 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 教室のアンマクを下げる。
- ② 公園のチュウオウに集まる。
- ③ すぐれたケンシキの持ち主。
- ④ 船がキテキを鳴らす。
- ⑤ 外国にリュウガクする。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 友だちとの約束を果たす。
- ② 政治を刷新する。
- ③ 出発時間が延びる。
- ④ 今年の寒さには閉口してしまう。
- ⑤ 山の頂にたどり着く。

三 次の言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の文中の□①～⑤にあてはまる最も適当な言葉を、後のア～サの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

いつも下級生に対してえらそうにふるまい命令ばかりする級友を、学級委員長の原田さんが注意してくれた。「たとえ相手が下級生であっても、□①のような態度はゆるせない。」と。私は□②思いがした。これまで、勇気のない自分はただ□③ように見えているだけだったのだ。

きつと原田さんは、次の生徒会長に選ばれるだろう。その実力は、□④だ。自分もいつか原田さんと同じく存在になれるように、がんばろうと思う。

- | | | | |
|----------|---------|---------|----------|
| ア 頭をかかえる | イ 折り紙付き | ウ 虫の息 | エ 肩を並べる |
| オ 手を加える | カ 胸がすく | キ 腹を割る | ク 指をくわえる |
| ケ 顔がきく | コ 青菜に塩 | サ あごで使う | |

問二 次の①～④の四字熟語の□にあてはまる漢字として正しいものを、後のア～コの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------|-----|-------|-----|------|-----|-----|-----|
| ① 針小棒 | □ | ② 刀直入 | □ | ③ 心伝心 | □ | ④ 馬耳 | □ | 風 | |
| ア 意 | イ 大 | ウ 以 | エ 安 | オ 短 | カ 太 | キ 東 | ク 当 | ケ 単 | コ 冬 |

問三 「決して」という言葉を使い、主語と述語のある一つの文を作りなさい。

